4 5
68
3

宮城県立図書館

一　鈍き大将の事　付今川家并山本勘介事

我国代々の家を崩す大将は人まちなる大将は第一番は小勝振る舞ひ第二番は大将第三番に臆病なる大将なり大将は三番に臆病なる大将なり

多く大将は見をさしてい大将と成る者一番なる嫡なる大将は見を不ふかして慮外慮外なる嫡大将の位を慮てを乱を大果剛

毋を我位なるゆへ我身を忘れ花月人花月人外人事迄とりてあそぶことに紀の八蔵鑑と

当方へ招い遣武蔵氏弓兵法る鉄炮撃て合

わ主どもこそ多の乃へ入れとさぶ義をば仕
奉れ仕の主宮く我を思ひ給ふらむと思ひ給ふ知乃
乃無公ひけるを家とるるをだに行ばもよきと
だに思ひ給ふらむ殺害を大おのの為ふ
事を妨ぬとも云れよ紀と養ハ為るの柿大石
乃智恵とそ下れ給ふ悪益まれさる紀よきを大おと
ひ給ふ盗まるるハ是だに大おとひ給ふ
を殺れ給へそ上ものよ為とも為わう
下ぶ給ふ成をも殺害と成くハさて見る事
うれとあひ給ふ紀大おを名ふ別まくく我志
ふ給ふ業まを思へるとひ給ふ理と思

ひ給ふけさ仕事をば我つの殺害ふ時乃接拶と
ひ給ふるをぬと思ぬとそ思ふ人は養ふ
奉我ふ給ふ吾恵を弁ざるをひ給ふ智恵を
ぬとまふとと思ふ吾恵紀奇うとて我とそ
むる人を殺害をとひ給ふもひ給ふ事を
をわきを別なる行る大石とも実貧ト
ふ家ハ多くく人さを二人二人ふて
を紀を也を余ハ殺害ふ給ふ
ぬ給ふそれをひ給ふる大おを紀大石
なる大おを下る事を人上中下を柿名と
実ふ奉代を紀家を紀人ふれを成時の

奴人みづからまやせんとぞ思ひ
て是物いそぎ大将をつけ給ふ人とゝ知
行とゞ分別の紀氏喫茶飯の義あるゝ
ゝ此若恵は弁を物なく兵我を猶ほ分別あ
りとぞ仕合らく之所とゝ推もあき蓋
と思ひ我身よりも情乃き地を二六時中ゝ考也
別小則なる志慮ゝるゝ人戯也ゝ考
乃る嫌あるハゝ下れ小戯也慮ゝるゝ分別さ
であるてゝ也好下鶴の翁ハ半ば是ゝるハ
ゝる是と戸めとぞ我ゝ書ゝ不法度と戸付ゝ
ゝ地回ゝどゝ乃人時ゝ自ゝけ也ゝゝ此ゝ

家ゝて小健人分別ゝ利義人ゝゝゝ蓋ゝ
ゝ下ゝゝゝめゝ先ゝゝ天ゝ此ゝゝゝゝゝ必出
乃人ゝゝゝ人ゝ蓋ゝ出乃人目利乃
ゝゝ代ゝ者蓋ゝ酒ゝゝ人ゝゝゝ人
ゝれゝ邪歌の法人戸ゝゝゝ家中ゝゝゝゝの
ゝ奉ゝゝ人ゝ笑也中ゝゝ家ゝゝゝ後未
代ゝゝゝ紀氏ゝゝゝ家ゝ他法ゝ大ゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ乃家中ゝゝ法人ゝ
ゝ乃人張回乃ゝ代ゝ実ゝ紀ゝ思ゝ人ゝ理ゝ
ゝゝゝ代ゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

家代々の成物なれども、あるべき筋賢人
なれども、氣しつ強き者の為にのみ、
家を治めくるべき乃至、君代新しく起る理を用ひ
始の家中善悪新旧に拘はらず、剛又不賢を以
しき仕法とも、もとより、何ぞ、
分別なく、我理なき、金銀へ行くべきなり、
仕法乃至、我新しくて、酒肴、美なるやうに
仕のると思ひ、如何、始めあるときは、
て、我仕方、はなはだ、仕くなるを、
とも、もとより、何乃、後
なる大将の下なれば、賢人乃、
しき仕方、賢人、
もとより、君乃家風、
仕合、
中乃、
なる大将、
仕合、
きと、
仕方、
賢也、
みな、

あるまじ。もとよりこれ凡夫なり。
異類の前よりはとそもいまだ成ぜざるゆゑに
異なる人々にはかの別あり。かの別をもつて義理を
をしへ。義理ふかきをもつてこれを思ひ
をもつてはかるべきなり。はかるべきなり。
とをもつて凡夫なれば大乘をもつて
思しかの法をもつて我異類の人々にて余乃異人
ふ凡夫なるゆゑに出家人乃身をもつて我法を
弘ゆゑに賊乞ふ人智恵者と古人乃ことく
智恵ふかくして善惡の義別もなく我身をもつて
乃ち我身の善惡をもつて我法を異類人

什我法をもつて弟子とはあり凡乃人ふるゆゑにか
どあれども理はもつぱら異類の人の理をいふ。
乃我の意中ハ上ゆゑ下ふるまで思ふ不思
也。不思とをもはかる理を完全ば。俗よ抱よ
たとをもなしぶく法を知見とめ我凡夫ハ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
おもふ遠常さをるゆゑ機根はよりて法
なり人間を凡夫への答惡今日を文
凡人ゆゑ大乘出家人乃ことく人と相違
を。適用ゆゑ時を機縁ありて我らをこそなど
門乃ことく。強ゆゑ理我法をもつてびを。

せるをかいてさもさぶらふ各仕新に腰紙をとく新言
などゆせかたこそまく負かたぐく見只出入人の
不重所なれども。扨をも出入人親類たり仕新か
親や兄や舅や叔父や法師などの出入と答か
きくぶらふをもあれと面へそたごりぶに用ゐ
ちをもかためはもを我とぐりとかに別ゲ紙して
親類出入乃ぐをかをもぶらふ。親を出入をる紙ゆ仕りり
あり人ゆ用らを我を用ゐる紙でおきを人をを
をゆ我を用ゐる人をぶをを人をもりうひ。
紙兄乃物紙引ゐるを病ゐ人をは母仕て無仕
ゆめ己をゆ小修字ゆ及び或八字ゆ修ゐゆ

いとをは井小一度も病を申。御重代屋敷
をいひてゐあてをゆ回ゐを明乃重人出入
をはをを見や祝の拍ゆと紙紙
実で己が門乃小者などに紙被官小ひはをゐ
ゆ分人を適合我ぜりりひあゐ被官ゐ元
をゐ郭なとを言名帳ゆ乃をを一本袴をはをを
はりをかいのまいれぐをぷりその程母を被官を
適出をぶ下分ゐゆ乃の清乃要をを自ゐつを
ゆ用ゐくを仕をを乃後幾を己をも赤く紙
を新をものを乃を程母を自慢して
ゆ新人紙幾己が明ゆを自慢をくはゐくを用をを人

とゞる畫眞はいことを云鳥に若きへども此る畫眞
はいこ鶯の自然にありきる縁りて又鶯の囀る
丸と見てをりいびるときは八句新なおの
様みとならばしさ丸やうと批判けり。己が
いぞとんといふくもなりけ野鳥の鳴下。
多る乃云ふ汝よる畫眞のあきだにれともう
くつりむとや續くもぞ。手柄乃德を能く人
乃三十字まで成までも仍けり覚ももれ人統る
畫眞はことゆるとなりよきを根元は是
与偏よる嫁なる大ある小事からせなる代
路乃下なく八百人の内九十又六人も絶法わ。

其中に於て此人ありとても己れが功徳なり
ともがく百人がうち内にある人だらんとおもい
たせぬなりさあらでも此人も其果もせぬ。
賢乃人は威光はなし。其人は賢人あり大
賢は不賢なる賢人は正法不賢は邪法の正法
邪人の事をはなに賢人は身を忘れ式は家を
乃敗ども終りけるぞ。終我は扨き獨他なり
とへども其君家をとそしなるる時ぞ式は我を
亡とる其家をといふとも所しき作法なるん
まく八中に合わき御法もいぞども綿々日不在
其経不識其政見とりふく地いりそされたる

ずれ時も人生まれながら知る者は有りといへども不
賢乃ちんじやうハ学むさくして明めざれば賢
人ハ手柄すしといへども纔二三度も見たと
見又意十度おりといへども賢なる心地して我
人を学ぶるは出来ねど家と我身を穿鑿し学
まくる御じとみるべきさても中は行るまだ愚人
どもハ見をときて言れ知らへいて稼ぎであれ人を
手柄だてにも聞し無手柄も何事と批判中せた
さりハ愚人ハ自ら一本鑓乃手柄よりは世も手柄ハ
十双倍もましなるべし。猶不賢なる人ハ無らう
聞る忠功といふしてみまくれども未熟で見つるを

紛も次第不敬なれど述懐あるとなくも未
未熟度の時も知る我にされさくも今又賢
人と知るべし。不賢未だ白いぬれども知るだ
朝臣ども何中。おしきる我もかくさし人にある賢人
のんきまいハ何も出ても能く無手柄なれば
しそわがる我家所よりも中となし。言ふんも不
賢人を聞る小具員ここまで清める見る嫁か
分け大将乃家中まで無穿鑿なれば。無穿鑿
も存理の訳る嫁大将の家も有ましき不賢なる
沙人。手柄もなくなるづかれまいば結句日来
よく紀ふ不賢人ハ威勢なきまだ窮字籠の時ハ

至りてハ甚しててまかへるとそこゆゑく合く不
思とさるゝ也前代駿河義元公乃時山本勘介三
河の牛久保より出て公の御家へ参るといへども義
く丈男にして一眼指も不叶足ちんば也御家
とも大将の志あれども抱えす[illegible]
富なる我たとへの我は宗兵衛尉とかけて伝
山本大将乃志様文城を取り弥也一切の軍法縄の
鍛錬の事と京流の兵法も上手也軍配とも得たる
奇なるとてせたりし人に右に沈の人乃名ゆ法を勧め
た背一片播城を陣も乃軍法ハ当所城とも
比みりとも人数をもちひて何とそ右抱の其

とおもんばかりとて[illegible]度云也と右門九年
駿府に居るうち兵法ゆゑく手柄二三度仕りと
いへども新当流の兵法にそなへるれと草履
取さへ一人持たる[illegible]にそ[illegible]にてれよ
[illegible]人ハなし是ハ今川殿の家より
[illegible]うすの[illegible]成武士乃無案内ゆへ勘介方
上乃批判[illegible]にわきゆ法なりとて小[illegible]済ち雪
山和尚りろ[illegible]乃[illegible]なまく[illegible]見れ[illegible]駿を
参三ヶ国の殿まつく[illegible]て織田弾正忠な
ども出仕と雪山[illegible]見すくして後義元公[illegible]
旬ち力[illegible]弾正忠る[illegible]長[illegible]のかへ人数とも

けるを孫とせるまて討死し給ふ大唐ゆるく八二万二千
人百万人数まて人数おほかたは敵ゆるく八万の勢ゆ
て信玄はさけるとはいへとも吾朝にてもかの氏康
も八千ばかり兵数八万人数と伐ばとも
うや夫乃元やう民略のあるもの軍をすれは九
つ勝ることをえるまてはの事ゆるあやうきをへ
付諸合をまて勝負をすべ人数を大軍とあらひ
はをゆはかれの人数はかりをんそれへはの人
数はをく立はえ〻こそ大軍はをそをえん
乃ゆ三万乃人数とをもちる大将の家老人
小人千ばかりあつはの人〻をなれと

ゆとはは信玄をゆとはをるをえ
あるんををゆ小付てをあやうきをる多人し。三
万ばかりの兵百三百人ゆ或は二千三千ばか
はもをべしはをく大軍をゆの俗ゆをやうはは
ゆはの人数をさつゆ時乃程ゆをえをべし。そ
乃兵をを人ばかり成をゆ人をゆはをはをゆ
ゆるをのをゆ。兵ばをるゆをいとををゆを人
してををゆをやうゆをゆ建速ををんをはゆ
はをゆ勢ををゆををををゆををををゆ人数
ををゆををゆをゆをんをゆ挑をゆ信玄の
ををゆゆ人ゆををして始る。兵ば搬を

そのうふ二尺三尺のうしなりのうしを立て二百位
方ちいさい紙もたれねて作るをとうこ
うれへとちうく大人数あいこうをうん大海
小組をなして周あるいうく人数をとれば
あるうるうくとをたうしをかう行ぬ
数八大きふきはもはじて大海乃器さ
ちうはいかるもをかれ野のちをを配
度まぎきそ又動外兵法乃後も新函流ぬ
ざはとて後をかれ新函流をとられ上
ぬぐらをを海ぐ京流をを活ちるはうもこ
まぐは動外ハ自然うをを力をそも数度を稲

あるふとのうくいうをなれハ上ハ作乃ちもを
ぬ紙をかもうををまうをを弁をうをを
をを作ぬを今行家運をて空響をを少人也。
いうふうぐのの小分家をを出くを軍法を
姫孫をいうく武士の知識なりと信会ここく
乃を作の百姓乃知行をくを先ぐ言らるくをを
一人作らぬ百姓下さうくと番代の小用
ハ人をとて板垣を作付をを作る作を小神小
とうをまぐ移新紙ハ甲府へをうをを祈を
来り礼とハをうるとを庭をて外百姓ぬ知行
とをさるをくを作ぐ支男をくを名をうをを

能く手柄してなをあらため。約束のごとく百貫をたまひ
與七とて家の家老あり。猪苗元と討死し
ければ氏康三代のなかに於て忠節なしと家に傳
ふる家老なり。氏康兵衆大夫をかねて紀五郎入人
得りといへども累数ありしまさば三浦太郎にいやと
いふ者あり。生れ馬を度ひ三浦が郎等となり。又八
氏小おもひ候を以てわりなく仕合よくだんだんと仕
遠江三河の大将敵となる。然るに永禄六癸亥年
氏康出るし三河の吉田小城をたり城の附を引
てをもって升俵ひくりくしくさして浅くのわる事を
焼くれとも小氏康公に對する者やさいへさは

ぎ行くは老方守千くらゐ人数九千あまりを作
は通き大なあれて関東の人々と喋る大くすすむ許の
程もなる九儀の逆心にあつて降参
侍る氏康公を別しあて終わりとそ來降りて
ありし川崎御月にすりなれ候ひて永禄十一
年の極月より細かく信玄駿河へ出陣の時氏
康公城をかまへかけ川の城へ行てその剛の兵
多ししといへども三浦が累年人えりとくしう
みなる代はる者とも所々。然るに氏康公世をさりし
後よの威勢なきゆへ小俵いくさしてまあはする所り。
一世をよく威勢もあはれ三浦太郎が親類の子まで下らし寄

天祢乃小芝原ゆく小真かきそて小芝原
成敗をく源氏三公山前よ酒ゝまゝどゝけづまゝに
たゝうも仏九月朔日若ゝれ石塔とゝいそぐめよ
ゝもみゝつゝどゝゝ後小食くゝ三畧軍議曰
強宗聚姦無位而尊威無不振葛英相連 種
徳立恩纂在位權侵侮下民国内譁諠臣蔵
不言是謂乱根とゝ時ゝ我なゝ行ゝて此書
とゝゝ人ゝくゝ可令ゝ別者也

天正三乙亥年六月吉日　高坂弾正記之

長坂長閑老
沼美濃助殿参